

音楽都市のエコシステム

Music City Eco system
ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー



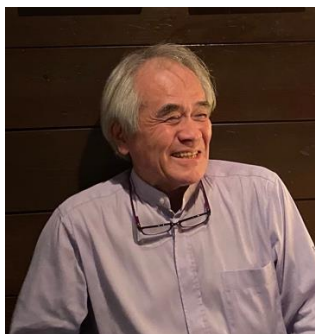
High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

インタビュー 大木雄高氏

日時：2023年8月11日（金）

場所：ジャズバー「LADY JANE」（下北沢）



大木雄高（おおき・ゆたか）

ジャズバー「LADY JANE」店主。

1945年栃木県生まれ、広島で育つ。60年代中央大学在学中より演劇活動開始。70年代劇団を主宰。1975年下北沢にジャズバー「LADY JANE」を開店。1979年地元の仲間と「下北沢音楽祭」を企画。1980年4月、多目的ホール「スーパーマーケット」を開館。下北沢初の劇場開館だった。以降、さまざまなイベントで音楽プロデューサーに携わるようになり、現在に至るまで多数を企画制作。

1985年西麻布に「ロマーニッシュ・カフェ」を開店（～98年）。あらゆる文化人の集合場としてフリージャズとアルタナティブの日本のメッカとなる。著書に『ロマーニッシュ・カフェ物語』（用美社/1995）、『下北沢祝祭行 レディ・ジェーンは夜の扉』（幻戯書房/2011）等がある。

【下北沢音楽祭】

1979年、地元のジャズ、ロック系の店5軒が共同主催した音楽祭。駅前広場に野外ステージを組み、安田南、亀淵由香、RCサクセション、カルメン・マキ、CHAR 他が出演し、2日間で5,000人の観客が訪れた。1991年から開催されている「下北沢音楽祭」とは別物。

下北沢音楽祭実行委員会には、経験者はひとりもいなかった。

学びながら始めた

———下北沢音楽祭はどのようないきさつで始められたのですか。

大木：1978年末に下北沢音楽祭を私が言い出してリーダー役はやっていただけたけれど、あいつとあいつを呼ぼうなんていうことをして、下北沢音楽祭実行委員会という名前をつけたけれど、それ以外名前をつけようがなかったしね。5人のうちやったことがある人は1人もいなかった。学びつつやろうっていう、そういうことだったんですよ。

石坂独は「独」というビートルズしかかけないロックバーをやっていて、「アダムス・アップル」という店は南口商店会振興組合の松本理事長の娘（松本容子）がやっていたんですよ。そこは開けたロックをやっていましたけどね。5人のうちジャズは私の店だけでしたね。でも5人とも大体知っていたから、イベントやるには素人だけれども友人関係としては何でも言い合うこともできる関係だったので、前向きにやるしかないじゃないかみたいなことでやりましたよね。1975年からの4年間。仲良しになった関係ですよ。罵倒しあいながらもね。75年に店を持ち飲み歩きするような……それは60年代後半からはやってはいましたけど。

———なぜ75年だったんですか。

大木：私の都合です。74年の秋になって、「あっ、年が明けたら30になるな」……1945年生まれ私には数え

で年を数えていたんですね。ですから、75年の年があけると30歳になるなど。私は演劇青年でして、劇団を主宰していた座長の務めは作演出であり、戯曲をようやく脱稿したらしたで稽古場をスケジュール化しないといけな
いか……お金がないから本番が一番短いんですね（笑）。台本は1ヶ月以上は絶対掛かって、稽古も絶対1ヶ月以上掛かって、本番は2週間だとしてもなんやかんややったら半年近く掛かっちゃうんですね。そうすると残り半年間何するかといえば、日々の生活費を稼ぐべく、ハードな力仕事とか、時給効率のいい仕事をしたりする。まあ、私は文章が少しやれていたんで、あの頃『週刊女性』『女性自身』『ヤングレディ』などの雑誌に、正社員記者が書いたものをリライトする仕事—読者に読ませるおいしい読み方にするっていうのを相当やりました。それで文章慣れたのかなと思っているんですけどね。つまり、演劇に集中するとそういう仕事はできなくなっちゃうんです。演劇に集中するためには、時間が取れる取れないじゃないんですよ。そんなことやってたら演劇なんか出来ません。でも20代だからやりくりしてやっていたんですよ。でも30にもなってこんなことをやっていたら私の人生恥ずかしいよなと思うようになってしまって……。

それで、75年の年明けに就職をどこにしようかと。年だけとって生意気なんでもこも受け入れてくれないんじゃないか……で、『読書新聞』というすごくハイブローな新聞がありましてね、愛読していたので受けようと。アテネフ
ランセだった試験会場には100人くらい来ていました。ひとりかふたりしか取らないんですね。で、みごとに滑りました。

『読書新聞』以外就職する気がなかったので困惑して考えていた時に、そうだ、映画観客としての歴史は26年もあると。4歳から観ていました。それと酒も父の相手をしていましたからね。広島から上京、蒲田で大成功した家財は空襲で全焼、戦後の栃木の田舎の疎開先だから遣り切れなかったんです。小さい頃から父に無理やり飲まされていました。だから映画と酒のキャリアは長かったんですよ。文化芸術でいうと、まあ、白秋や朔太郎の詩とか三島、大江の小説は好んで読んでいましたけれど、それに近いのがジャズだったんですよ。中学卒業直前の15の時にませた悪友が来て、「ジャズを聴きにいこうって」。「ベニー・グッドマンとか？」って言うと、「違う！もっとガツンとくる奴だ」って、ハードバップ・ジャズに出会った。そういうのは聞いたことがなかった。「仁義なき戦い」でも有名なしまの別れの流川通りという広島の大繁華街にジャズバーがあって、そこにそいつが連れていってくれたんですよ。当然酒は禁止なので無理矢理苦いコーヒーを飲んで。でもドアを開けた瞬間に、8席くらいの小さな店だったんですけどドアを開けたら音量が大きくてぐわーっと一発でやられちゃったんですよ。聞いたことがなかった音楽だったからその激しさにもやられましたね。高校入学時は300有余人6クラスで6番の成績が1年の期末には135番に落ちて学内問題になったが、そのジャズは音楽というより“被爆都市広島で生きる新武器”は止められなかった。

で、「PUD」には通い続けた。バーだから昼ではなくて6時からだった。でも高校の授業は3時くらいに終わるんですよ。平和公園に行つてぶらぶらほつき歩いて、流川までは歩いても大した距離ではないので、そこで平和公園で時間を潰すのが一番便利でした。脳内から、精神から全部やられたハードバップはそこでないと聞けないから、ずっと開店待ちするんですよ。バーですし15歳で行くような場所じゃなくて、しかも場所が場所ですから不安抱えながらも、武器を手に入れたと自覚して1人通い続けた。紹介してくれた大森くんには感謝です。

だから、映画とお酒というのは年齢に即していい加減に観たり飲んだりしていたわけだけれど、ジャズはそうじゃなかった。酒と映画に勝る三大骨子にすれば、バーができるんじゃないかと思ってしまったんですよ。最初から下北沢以外念頭にありませんでした。

下北沢は路地が命の街。

路地を歩けばいろんな場所に出会う。いろいろな人に出会う。

—————現在のような演劇の街ではまったくなかったんですね。

大木：まったくないです。が演劇人や音楽小説家予備軍が多く住んでいたんです。安い三畳一間とか四畳半一間とか、賄いを出すような下宿も相当あった。会社組織じゃない個人商店みたいなほうが多かった。いまでもそうですが。

私が来たのは66年でした。64年に大学受験のために東京に来まして、66年に選択科目かなにかのことで相談した同期男がたまたま下北沢に住んでいたんです。下北沢駅北口の現ピーコックの隣にあった喫茶店で話は15分くらいで終わったんですけど、帰るに倦びないと思ってウロウロしていたら、ジャズ喫茶「マサコ」に行き当たってショックを受けたんです。

「マサコ」は昭和26年の開店なんですよ。初めて来た街だけど、「変わった街だな、そういうのがあるのは尋常じゃない街かもわからないぞ」と思って。歩くと店はポツンとしかないんですよ。「マサコ」もポツンとあった。下北沢は路地が命の街です。路地を歩けばいろんなところに出会う。もちろん初めて降りた駅ですから歩かなければ……分らないままとにかく歩けばどこかに出る。全然新宿っぽくないんですよ。で、流れてくる音とか匂いがね、つくりは新宿っぽくないのに匂いとか香りがね、新宿っぽかったんです、私にとっては。だからもう好きになっちゃって。新宿9割下北沢1割からどンドン下北沢のほうが逆転しちゃって、8割下北沢2割新宿みたいになったんですよ。なぜかという路地を歩けばあるくほど、その店と親しくなっちゃうんですよ。ママさんやオーナー、マスターだけでなく、お客とも親しくなっちゃう。「またここで会おうぜ」と気軽に喋り合うのが下北沢で。新宿もそうではあったけれど、下北沢のほうが1人分が体験出来る空気体積が圧倒的に多く皮膚感がありましたね。やっぱり路地……路面というか、その頃は路面店が圧倒的ですから。

マサコに行くと私でも知っている“あの人”がお客でいるんですよ。詩人の吉増剛造さんとか写真家高梨豊さん、次いでペットの日野皓正さん、沖至さんとかね。ジャズ喫茶マサコですから、ジャズ系はわかるとしても、まあ、すぐ仲良くなった積もりになって、ママの奥田マサコさんとも親しくなっていって、どンドン客の輪が広がっていったらうんだよね。下北沢は。そういうのが大きかったですね。

—————当時の下北沢はどんな街でしたか。

大木：お洒落でしたね。お金があってお洒落にしているのではないんですよ。75年1月に「レディジェーン」が出来て5ヶ月後、ジャズバーやジャズ喫茶が3軒くらいできた。で、最後に下北沢ロフトが出来たんですよ、11月くらいに。音楽を専門で聴かせる店が75年だけで5、6軒出来て、音楽人を掬い取るような街になっていったんです。

ブルースバンドは東京にはなかったな、正確にはね。「ウエストロードブルースバンド」という京都人と大阪人が合体したようなバンドが、次いで「ソー・バッド・レビュー」があって、それが東京に攻め入ろうぜ、とやってきたんですよ。「じゃ、下北沢に来ればいいじゃないか」みたいなね。下北沢を知らない関西のブルースをやっている連中が名付けたのが「ださかつこい街だ」って。だからお洒落感があるけれどもダサさもある。関西弁では「いなたい」と言っていましたね。東京でいちばん「いなたい街」が下北沢だって。

で、「ウェストロードブルースバンド」が来たら、次々とどこどこか来るようになって、翌76年には関西の街かというくらいに京都弁・大阪弁・神戸弁が飛び交うようになって……どこへ行っても関西ミュージシャンに街が席卷されてしまうくらい大量に来たんです。これが大きかったです。

なぜ大きかったかという、下北沢音楽人をやっていた連中がたかを括っていたんですね。そんなに来るとは予想していなかった。金子マリはじめカルメンマキだって予想してない。舐めていたというか、脇を甘くしていたというか。で、東京人が対抗できないじゃないかってなっちゃったんです。そういうのがあって、余計「関西人と勝負しよぜ」みたいなね。

76年にそのようになってしまったので、努力しないで客集めする方法ができちゃうんですね。それで78年、「あの空き地があるじゃないか」となったんです。本多劇場ハイタウンビル。本多一夫さんが持っていた土地で800坪くらいあって相当広大なんだけど、ずっと入り口だけ整地して駐車場に使うくらいで何年も放置されていたので、そこでやればいけないかと。本多一夫に「貸してくれ」と言ったんですね。「若者でお金がないから、金額はつけないでよ」って言ったら「わかった」と。それで破格の値段で借りたんですよ。10万くらいだったかな。そこで野外ステージをつくって照明とか音響はイントレ（足場）つくってやればできるんじゃないかって。で、面白いと言って乗ってきたのが、（ビートルズ専門バー「独」の）石坂独であり、（「LOFT」の）平野悠であり……じゃ、5人でやろうと言ったんだけど、やり方を誰も知らないないもんだから、実行委員会を開いても議題が進展していかない（笑）。やり方はわからないけどやること自体は面白がったんだね。

「下北沢発の初の地域密着型音楽祭です」と謳い、 企業からの援助金は1円もなかった

———ウッドストックとかは意識していましたか。

大木： そんな大それたことを思っていたか分らないね。まずいちばん苦労したのは、出演者を決めようとするのでんどん出てきちゃって……2日間やったんですけど、昼から夜までやったとしても、10～12バンド位を締めにするのが至難の業でね。喧嘩が起こったらまずいじゃないですか。だからまず「下北沢に縁のある者」というのをまず条件にした。下北沢に住んでいなくてもいいけれど、下北沢に縁や所縁があればいいじゃないかと。そうしたら、「俺はこういう縁がある」とかいう奴が出てくるわけですよ。苦心したね。それが実行委員会の6割方の議題でね。そうやって決めたんですよ。そういうおもしろい実行委員会で進めていったら、まあ出来るじゃないか、みたいになっていったんですよ。照明とか音響とか裏方さんは、イベントをやったことがなくても出演者たちを知っていたからすぐに決まっていくわけですよ。

———下北沢音楽祭をやろうというモチベーションはどこにあったのでしょうか。

大木： 『平凡パンチ』と『週刊プレイボーイ』が二大男性週刊誌だったんだけど、『パンチ』なんかが当時の風俗現象を切り取ったりしていたんですね。下北沢もよく取り上げられていたけれど、山手線の外の三大都市というと、吉祥寺、自由が丘、下北沢だったんですよ。で、大体いつも3番手。それで私もムツとして、週刊誌の書き方を変えさせてやろうと。そういうところが下北沢音楽祭、それが当然の帰結じゃないかと思ったわけですよ。

———他のまちに勝っている部分はどこでしたか。

大木： 吉祥寺の方が街が何倍もはるかに大きい。ライブハウスも多い。当時、下北沢はライブハウスはロフトだ

けでしたからね。向こうは伊勢丹も三越もあるような街ですよ。下北沢にはデパートなんてあったことがないからね。自由が丘は田園調布が近くにあるからお洒落で売る以外ないと私は馬鹿にしていました。こっちは「ださかっこいい」と言われているんだから。で、75年にやってからはそうになりましたよ。週刊誌バックに下北沢すごいったった。

—————その後、本多さんが劇場をつくって、劇場のまちになった。

大木：ちょっと待って。それより以前に、最初の劇場はわが「スーパーマーケット」と言うのが正しいのだが、そうそう、そうやって文化が広がっていくわけです。

—————下北沢音楽祭は街の人が始めた音楽祭だったのですね。

大木：誰も音楽祭やったことない素人5人の集まりだというのが結果的には良かった。素人味が滲み出た音楽祭だった。手づくりっぽい。もちろん「下北沢発の初の地域密着型音楽祭です」と謳いましたから、本当に文字通り密着していたんです。企業からの援助金は1円もなかったです。そこいらへんも新聞に書かれましたね。すごく好印象を与えちゃった。

—————資金は委員会の方たちで出したのですか。

大木：資金なんて正式には実行委員会は誰も出してないですよ。お金がかかるのはチラシ類ですね。会場は後払い。出演者にも後払い。後払いができないのはチラシだけ。お金がかかってないんですよ。5人が何万かずつはポケットマネーを出し合ってますけど、当日、お客が来ない限り収入はないわけ。広告収入ゼロ。「広告どうとったらいいの？」みたいな。そういうことが好印象を与えたらしくてね。

9月1・2日の2日間だったけど、夏至と2ヶ月ちよっぴか離れていないので、夜が遅いんですよ。でも夕方過ぎてラス前バンドくらいで陽が沈んできたらステージに灯りがついて、渋谷発の井の頭線電車からライトが照らされて客がバーツと見える。電車は暑いから窓が開きっ放しなんですよ。窓から進行方向右側に座っている乗客がみんな見るわけですよ。「なんだ、なんだ」ってなると出演者もびっくり。次から次に来る電車も徐行し始めちゃってね、それが翌日の新聞に出たんですよ。1日目が大雑把に言って2,000人、翌日はそういう効果があって3,000人。2日間で5,000人集めたなんて、下北沢ではあり得ない。今後もないでしょう。

入場料は一日1,200円でした。2日だと2,400円のところを2日券は2,000円にした。2日間買ってもらう方を増やしたほうがいいんじゃないかってそうしたんだよね。それは当たってチケットの残りは無くなったけれど、お金は残りませんでした（笑）。すぐに収支を計算させてね、すると、どうにかこうにか残ったから、安い打ち上げ代は実行委員会費で出したんですよ。で、チャラになった。でもみんな気分が晴れ晴れした（笑）。

4回目から商店街に引き継ぐつもりだったが、誰もやらず音楽祭は途絶えた。

しばらくして、まったく別の音楽祭が登場した

大木：うちがやろうと思ったのは本多一夫さんの空き地だったからだったけど、整地し始めて着工するような青図ができはじめたからできないじゃないか、となったが仕方がない。81年末に本多劇場が柿落とし公演をやったんですよ。早く早くと本多さんにけしかけて、2月に劇場で3日間とってくれたんです。それが82年2月の第2回目。そして翌83年に3回目をやりました。

1回目には世田谷区の後援を貰っていたんですよ。区長室に陳情に行って後援を取ったんですよ。4つの商店

街は冷たくてなにも聞いてくれなかったんです。屋外音楽祭なので、騒音やら路地の混雑やら含めて協力をお願いします、って行ったら、話はわかったけどドン！みたいな感じだったんで、「戦法を間違えたな」と思って、世田谷区に後援名義を戴こうと、トイレとかテントとか、区の持ち物を提供してくれないかと言ったついでに後援をお願いしたのです。すると提供しましょうと言ってくれた。それから大変でしたよ。空き地を客を入れるために更地にするのが。コンクリートの山みたいな瓦礫とか夏草がものすごく繁殖してて。まず雑草を抜くことからやらなきゃということでボランティアに30,40人くらい来てもらいました。夏草除去が終わっても、それから瓦礫の除去が大変で夜が更けていくわけです。その時に予想しないことが起こったのですよ。

—————本当に手づくりですね。

大木：そこも素人臭さじゃないですかね。作戦を立てようにも作戦がないですからね。その時に、明亭がね、「みんなで食ってくれ」ってラーメンと餃子を40食も持ってきてくれた。他の日はアンジェリカというパン屋がパンをどさっと持ってきてくれた。注文も相談もしていないのに、善意の協力で持ってきてくれた。そういうのが嬉しいから、ボランティアの諸君にも伝わるじゃないですか。だから体力だけあって能力はなかったんですね、組織としては。これは一回目の話。だから、2回目、3回目は楽でしたよ。1回目で学習しましたよ。

初回の空き地でやった時、世田谷区後援という印籠を持ってもう一度商店街に行くんです。そうしたら手のひらを返したように「よろしくお願いします」って言うんだ。本当にお笑いでしょう。調子いいんだよね。

で、3回やって、もともと地域密着の音楽祭をやるって始めたんだから、もう引退しようぜ、っていうことになって、商店会の青年部が来てくれれば、3回目は俺たちが指導するから一緒にやって4回目を引き継いでやれよ、と言ったわけです。いいアイデアだと言うんで、3回目は商店会の青年部を呼んでやった。で、引き継ぎ終わったはずだったんです。ところが2年経っても5年経っても一向に立ち上がらない。つまり、商店会ってそういうところなのか、と腹立ってきますよね。やり方は教えたんですよ、懇切丁寧にね。やる気がなかったんだな、としか思えない。75年の9月1、2日の立ち上げの時は、立ち上げですから目が回りませんよね。世田谷区の後援という印籠をもらったら商店会はひょいっとOKしたわけですけど、そこで初めて下北沢の4つの商店会がすごく仲良くなって。しかも実行委員会とも仲良くなって、「商店会あり」という下北沢になったというのも予想不能の効果だったと思うんです。商店会がやっていたのは、天狗祭りとか阿波踊り。そのふたつもどうなったのかな。いま4つの商店会は決して同調する中とは言えませんから。

そうしたらですよ。世田谷区が「北沢音楽祭」というのを立ち上げるんですよ。世田谷区主催。それ盗作ではないかと言ったんです。うまい逃げ手を考えたらしい。これ「下」が付いてないんですよ。北沢音楽祭。汚ないよなあ。

でも、世田谷区が自立で出来るわけじゃないですから、その頃もうロック系のライブハウスもいっぱい出来ていたので、世田谷区はそこが一番力量あると見込んだ「UKP」に丸投げしたんです。そうしたら手づくり感がなくなった。業者発注の音楽祭。それでも北沢音楽祭は流行りました。そりゃ世田谷区の税金で援助されていますから。音楽祭に出て税金もらえるんだっていう、そういう音楽祭をやっちゃったんですよ。

で、更に汚いのが、数年後「下」を付けたんです。それでいま何年やってるかですよ。

—————ということは、現在の下北沢音楽祭は、大木さんたちが始めた下北沢音楽祭とはまったく異なるものなんですね。

大木：まったく関係ない。騙しですよ。ひどい騙しですよ。世田谷区行政が絡む騙しですから。私がいま言った

ことが真実ですが、あまりにも胸糞が悪いので言いたくもない。“北沢”でやっていた時よりも“下”を付けたほうが数倍長いです。「北沢」は緩衝地帯ですよ。だったらいいだろうって舐められたんです。ぶっ壊しにいかうかって本当に考えました。まあ、言っただけですけどね。

—————明らかに区によるプロモーションの音楽祭になってしまったわけですが、下北沢の音楽人は別のかたちで対抗しようとかたちにはならなかったんですか。

大木：時代が経ち過ぎたといえば時代ですよ。あんなの、知るかよ、軽蔑の対象じゃないか、みたいな。

—————ミュージシャンにしてみれば、出られるステージがあればいいわけですからね。

大木：勿論。罪はありません。まあ……世田谷区が税金で保証している音楽祭で、業者も入っているわけですから……業者も儲け仕事でやっているわけですからね。

音楽産業が変貌した90年代以降、 街は観光地化していった。

—————北沢音楽祭が出てきたのは90年代。その頃から街が変わっていったという気がしますね。

大木：まあ、大型店が路面店に圧倒的に増えましたしね。10店くらいはいるようなところに大型店1店ですからね。だからもう違いますよね。古着屋ですら企業古着屋ですよ。

—————その分、来街者が増えた……。

大木：増えてます。駅の乗降客数をみても増えるばかり。観光地化しています。本当にそういう状態なのでね、怒りを乗り越えて卑屈に嗤うしかないですね。

—————下北沢の分岐点は90年代でしょうか。

大木：大きく言えば、75年を契機にして爆発したのが下北沢音楽祭ですから、「吉祥寺・自由が丘・下北沢」という順番ではなくなった。80年代後半あたりから、雨後の筍のようにぼんぼんライブハウスが出来ましたからね。テレビの「イカ天」が大きかった。あれでミュージシャンを増やしちゃった。ライブハウスにプロが出ますから。でもプロを出すのがライブハウスの狙いじゃないですよ。「イカ天」とか、これからの人たちを出すんですよ。三番手です。で、その当時、1バンド10万。3バンドで30万。30万そのままライブハウスが持っていっちゃうんですよ？一日で。とんでもないです。出演者から取るんですよ。だからどうい現象が起こるかという、10万払ったんだからチケットを売らなきゃいけない。それを3バンドで複合現象が起こるわけです。だからAというバンドはAのステージだけ見るんじゃないでBもCも見るから、3倍とはいきませんけれど、2倍や2倍半にはなるでしょ。儲けたいからどんどん下北沢にできるわけです。これも嗤っちゃうよね。

学生バンドも増えるでしょ。「あそこに行けば、有名なプロと同じステージに立てる！」。これはすごいんです。だから、有名ミュージシャンは月に2、3回出ればいいんですよ。だから、商売根性が先に出ているという残念現象ですよ。

—————街としてミュージシャンを育てているというわけではない。

大木：街とは殆ど関係ないです。ただ下北沢というブランドみたいな土地でやっているというだけの話。

—————関東圏だけでなく、大阪からも若い子が下北沢のライブハウスに出ていますよね。

大木：それは下北沢のみではなく、全国的なものでしょうね。やっぱり東京が中央集権化してしまっているんで

すよね。大阪や福岡より東京が圧倒的に大きいですね。

—————SNSで音楽をつくってネット上で有名になるミュージシャンについては？

大木：そういうことをやっているミュージシャンを虐げないために、多様化とかいう言葉でうまく繕うんですよ。つまりね、薄く広くなってる。要するに、質を求めるのではなく量を求める。

—————質を求めているお店として、ご自身が評価されているお店はありますか。

大木：それも相互作用の、相対関係の問題だから。「うちはそんなところに巻き込まれない」なんてところはないです、残念ながら。昔はあったんですよ。競合し合いデコボコがあり、「なにくそ」みたいなところがあったんですけど……ライバル視するところもなくなったというのか、だから「同調」ですよ。同調圧力ですよ。個性というものそこに関与することですから、下北沢が1975年に若者雑誌がいうところの「ださかついい」とか、関西人がいうところの「ジャズかついい」というようなものでもなくなっちゃったわけで……。

音楽にしる演劇にしる、街に人が介在することで文化が生まれる。

商業化することで、クリエイティブなエネルギーは弱まる。ただ、路地が残っていることが救い。

—————最近の駅前の開発についてはどのようにお感じですか。

大木：それはね、まあ、空き地というか跡地の再開発は小田急がよっぽど考えましたね。住民に納得感あるようにと相当考えたな、と思います。窓口になった担当者が懇切丁寧に私らに降りて来てくれて、商店会にも振興組合にも説明して和を取ってくれた……。

—————対話は多かったですか。

大木：それをしないと駄目だったですよ。でもね、その男が人事異動で担当からはずれちゃった。

そんな状態になったときに、京王が「ミカン下北」を作りました。これが今の段階で決定的な駅前再開発。下北沢に来る人種を大きく変えましたね。渋谷のApple系みたいなのを掬うような街になってしまった。センター街とか交差点とかのApple系。だからブレーキしようにも無駄です。商店街もしようともしないし。“ジェントリフィケーション”ですよ。商店街はそれを狙っている。でも下北沢で個人商店をやっている人たちは一番、旧来の下北沢を欲しているわけですから。そういう人たちは、かつての下北沢はなくなった、と言います。必然的に家賃も高くなっていっちゃってます。

—————クリエイティブなエネルギーは街として弱まったと思いますか。

大木：弱まった。もともと商店街振興組合って、そんな力強いポリシーの持ち合わせはないわけです。不満を抑えることが第一義なんで。金を与えておけば不満は収まるだろう、と。

—————でもレディジェーンのような店があることが本当の拠り所ですね。

大木：そうあって欲しいですけども……ここも変わってきつつあるんです。Apple組が流れて来てるんです。ここも有名店だから、「一回くらい行ってみよう」という“体験派”が、2年3年経ってもずっと続きます。防ぎようがない。

—————「とりあえず行こう」「行ったことがある」みたいな観光になりますね。

大木：下北沢は外国人客が昔から多いんです。でも質が変わってきました。アラブ系は比較的少なくて、白人と黒人が多いですね。でも質が変わっています。うちは一杯900円だけど、カクテルになると1,500円+サービス

チャージからになる。白人黒人の99%がカクテルを所望するんですよ。かつてはそんな現象なかった。メニューを見て高いと思ったら注文しないで帰る、というのが外国人の定番行動だったんです。それがいま全然ない。高いものを頼む。

だからハズレ組といえば失礼ですが、金離れは悪くないみたいです。でも2杯は飲んで戴けないですね。1杯で1時間とか一時間半とか。つまり、酒場の客のあり方は分かってない、ということです。だから私はむしろ来て戴かなくてもよいです。（一見さんお断りみたいな）スタイリッシュなことはやりたくないですけど。

もともと49年前、ここを目指してくるお客さんだけで好くて、あえて駅から少し離れたところに店を構えたんです。通りすがりのお客さんは入って戴かないでいい。自分の狙いたい店にしたかった。ジャズと映画とバー。野球ゴルフの話を読んでもこの店には似合わないから。

————「LADY JANE」の常連さんは音楽の好きな方ですか。

大木：それもね、時代に依るんですよ。時代を一番推し計れるのは、数字的に言えばリクエストが圧倒的に無くなったと言っていくらい少なくなりましたね。昔はリクエストだらけでした。

————お客さんは地元の方が多くですか。

大木：そんなことはないです。昔から、青山から来たとか原宿、西麻布、又は全国から来たとかいうお客は相当いましたね。宣伝費をかけているんじゃなくて、ほぼ口コミですね。

————再開発されて下北沢の良さはなくなりましたか。

大木：再開発の世紀って20世紀だと認識していたんだけど、21世紀になってからいきなり世田谷区が電撃発表して、「なにを考えたんだ」と思いましたね。ですけど、路地がいじられていないんです。路面は多少はいじくっていても、路地は狭いですから建築的にもいじりようがないんじゃないですかね。路地が放置されているからまだ救いだなと思っていますね。

タワーマンションを建てるどころって、生活の基盤がないじゃないですか。道路がやたらと太い。だから、人間が会おうところでもない。出会いようもない。文化系の施設ができて大型で……。音楽にしろ、演劇にしろ、街につくるわけで、その街にはなにが介在するかといえば人間しかいないわけですよ。人と街は基本中の基本ですね。

High-Life

「都市×知」
音楽都市のエコシステム
Music City Eco-system

<研究メンバー>

服部 圭郎 龍谷大学政策学部 教授
紫牟田 伸子 株式会社Future research Institute 代表
水本 宏毅 株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター
榎本 元 公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員

<表紙デザイン>

伊藤 愛 株式会社ソフトマシーン

発行 2024年7月
発行所 公益財団法人ハイライフ研究所
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-14 銀座YOMIKOビル8F
TEL03-3563-8686 (代表) Fax03-3563-7987
<https://www.hilife.or.jp/>
©公益財団法人 ハイライフ研究所
©株式会社Future research Institute
